

第11回年会記念講演

教師生活 50年を顧みて

元秋田大学教授 岡村 栄

1. テーマについて

私はこれまで小学校の教員と10年、その他大学を含めて40年、合わせて50年の教師生活を送って来ました。東北数学教育学会の講演を依頼され、お引受けせざるを得ないことになりましたが、講演の題目としては、算数・数学教育研究50年とでもしたいところでした。しかし、今日お集まりの先生方は数学教育の研究を深くやっておられる方々ばかりです。私としても現在あらゆる講師等と引受けしており時間的な制約から、より一般的なテーマを選びました。しかし、教師生活とすることになると他の様々な教科も問題になるかも知れません。今日はこの50年の教員生活の歩みの中で自分自身は何を感じて来たかについてお話ししようと思います。

今日は研究発表が7つあり、算数・数学教育の研究者も、連続的に研究発表と聞かれるのは疲れることでしょう。今日の企画をたてられた方はそのことを考えられ、私に講演を依頼されたのではないかと考え、心理学的な意味も考えて、研究発表の息抜きとして私のお話を聞いていただければと思います。

2. 体験的に見た教育観の変遷

小学校入学は大正5年です。教育を受けるということを含めて考えると、教育に関係してから今年で63年になります。小学校は私と一緒に42名の児童が卒業しましたが、そのうち中学校(旧判度)入学者は私を含めて4名、女学校には数名の入学者で、これ

でも当時としては多い方だったと思います。

当時村の人に、「お前は中学校に入ったのだから、村の目下石浦の水が何石あるかわかるでしょう」と言われました。石というのは今の人にはわからないかも知れませんが、まあ、何処あるかと聞かれたようなものです。直方体、立方体、円柱、円錐等の体積や何類かの容器の容積といったものは学んだわけですが、目下石浦の水の量というのはいわかりませんでした。この話には当時の世の中の人々の、学校や教育に対するものの考え方がわかるものではないかと思えます。

その頃は福沢諭吉先生の「学問のすすめ」の考えが世に広まっており、学校で学ぶことの大切さが知られていた時代でした。知識主義の時代であったと言うことができます。

中学校と出てから、将来何になるかについては随分と悩んだのですが、村では学校の先生は一階級上のように思われておりました。そこで、先生にならんと決心し、福島師範を受験しました。当時は不況の時代で志願者が多く、体格がよくないと合格しませんでした。私は第一回目の身体検査で、左の耳の鼓膜穿孔と尺差らず、要するに身長が不足ということで、現代ならメートル足らずということになりましょうか。学科試験を受けることもできずに不合格とされてしまいました。その日の夕方、福島から仙台の方向に向けて汽車に乗り、途中岩沼駅で乗りかえて家に帰るのですが、白石川のほとりに溺れた児童を助けようとして自らの命を絶った小野訓導の殉難碑が車窓から見えたとおもいます。

自分の将来の第一の希望が絶たれてしまったので、この殉難碑を見て車窓から青春の涙を流したのでした。もろろん、これではいけないとの考えもしました。そして、小学校の時代の恩師が豊島師範

を卒業して東京で先生をやっておられたので、この恩師を頼って上京し幸い豊島師範（現在の東京学芸大学）を受験して合格し、恩師から、「ゴウカクシタヨロコベ」との電報をもらいました。この短い電文の中に、先生の温い心持が込められているようで、教師としての心構えを教えられたように思います。

当時の豊島師範は合格者120名、志願者1500余名だったと思います。「大学は出たけれど」という映画さえあったと思います。師範学校は頭のとっぺんからつま先までが官費で支給され、在学中は服も無料でした。そのため官費生などと呼ばれていましたが、卒業すれば就職ができたのでした。

私は中学校を卒業して師範学校に入ったわけですが、師範学校は修業年限が1年間で、これだけでよく先生が勤まったものだと思います。見よう見まねでやったのでした。卒業後は小学校に勤務しましたが、卒業後1年位いたってからは、私立の大学の夜間部の高等師範部に入学者が多かったのでした。私もそうですが、これは中等教員の免許状を取得するためでした。当時中学校の教員の初任給は師範学校を出た小学校教員の初任給の2倍からそれ以上だったのでした。

私と同じように地方の中学校を卒業して東京の師範学校に入学した者は中学校の教員の免許状をとることを志す野心をもった者が多かったのですが、これは今お話しした経済的な問題の他に、小学校の先生より中学校の方が上というふうな考えが世の中にあっただからでもあるのです。実際教員を呼ぶ呼び方もそれそれ異っており、小学校は訓導、中学校は教諭、高校、大学は教授だったわけですが、このような生き方は、立身出世主義、裏を返せば利己主義と言えるでしょう。このような主義は当時の国策とも関係していたと思います。

軍縮会議以後、余った将校が学校に派遣され富国強兵の思想が学校の中に入って来ました。徴兵検査には検査官の一人から「兵隊になるだけの国のためではなく、教壇に立つこともまた国のためである」と説かれましたが、私は徴兵検査に合格したいと考え、自分の考えを述べました。徴兵検査に合格しないと言うことは、当時としては一人前の人間ではないと言うように見られたのです。

結局第一乙種ということに合格し、軍隊に入り、4ヶ月の教育を受けました。先程お話ししたように軍縮会議で日本は他国より厳しい軍隊の縮小を迫られたので、量的な縮小を質的にカバーするという考えが生じ、一人で敵の軍艦一そうを撃沈し、自らも命を絶つといった持攻精神が生まれた時代でもあります。このような精神と身につけた青年を養成するというのが教育上の国策であったわけであり、今日からみれば非常に考えにくいかも知れないが、また現代は個人主義、自由主義が盛って考えられているように思われます。いすれにしても国家主義、ナショナリズムの時代であったのです。

3. 教育研究と教育現場

師範学校卒業当時は新しい教育思想が次から次へと流れ込んで来ておりました。算数教育においては生活算術、算術教育の御土化、作問主義の教育などです。私は中等教員になりたいと考えていたので、このような新しい教育思潮の研究よりも、自分の資格取得のための勉強ばかりしていたので研究会にはほとんど顔を出しませんでした。もちろん研究会がなかったわけではありません。今日の日本数学教育学会の前身である日本中等教育数学会も各地で開かれていました。現在のような活況はなかったように思います。

普通、研究会と言っていたものは、今日の公開研究会のようなもの

ので、公開授業を中心とし、その後には研究会と研究会を行なうというものでしたが、この研究会は現在のように活発ではなかったとはっきり言えます。また、基礎的な研究は重視されず、すぐに役立つ研究の現場の者には迎えられていたように思われます。新しい理論の研究は師範学校の附属や、私立の学校で主として行われていました。その中で私の印象に残っておりますのは玉川学園や成城学園などです。

成城学園の授業参観に行つたことがあります。1年生の算術の時間で加法の学習をやっていました。丁度大相撲の夏場所の頃で、これに合わせて、子ども達をクラスに仕立て、数字を書いたカードを持たせて相撲の取り組みのようにして答をさせさせていました。男達は非常に喜んで学習を行っていました。私も見よう見まねで自分の学級にためしてみたとこの学習が進みました。平幕力士が時に大関を倒すといったこともありますが、等方等に、環境を巧みに生かすことが思わぬ効果をよけることもあるものだということを知ったのでした。

こんな工夫をしたこともあります。兵隊の階級をとおし算数の計算問題が10題できたら星一つを与えることにし、教室の後ろの方に紙を貼って、下に名前を書き、星を与えていくというものです。これにも子ども達は大変に喜んで勉強をしました。順々に階級が上がっていくことが、子どもにとっては自分の成長が具体的にわかったからだと思います。このことは大人となつての印象として残っているらしく、数年前、40余年前の教え子の中に、「先生、万年軍曹と覚えていただけますか」という年賀状を送つてよこした者がいます。

教育理論というものの、これとどのように現場に生かすのが問題となるでしょう。生かす工夫があつて理論というものは役立つところ

とができるものなのです。なお、「教」の字は「夕」の部分に土などからわかるように校舎を表わし、その下の子は児童で、「攴」はムキを表わしているそうです。私は現代的に解釈して、ムキはやる気を起させる刺激、自主的活動のようなが刺激であると考えております。

4. 教員養成について

私が師範学校に入学した当時は各県に男子師範と女子師範があり、男子・女子師範には高等小学校を出て5年間学ぶ1部制と、中学校を卒業して1年の修業年限をもつ2部制とがありました。師範学校の上には高等師範学校がありましたが、これは中学校の教員の資格を得るもので、東京高師、広島高師、奈良女高師など少数しかありませんでした。

教員養成機関ではありませんが、検定試験制度がありました。しかし、中等教員になる試験は1年に20名か30名程度合格、高等教員(高等学校、専門学校)になる試験は隔年だったと思いますが、1回に2,3名程度の合格者しか出ないという非常に難しいものでした。

師範学校は全寮制度で軍隊生活そのまゝの生活であり、起床6時、整列(点呼をとります)、消灯は9時で、試験の時にはそれ以降自習室が開放されましたが、試験時以外はそれもなく、束縛の厳しい生活でした。常にたたき込まれたのは、教職は聖職であるということであり、また師範魂を持つということでした。もっとも師範魂の解説は一度もなかったようです。小野訓導や松本訓導の例のように、児童のために尽すこと、場合によっては児童のために一命をも捨てるということであったと思います。昭和九年釜島師範の専攻科に居

た時、秋に旅行に行くことになりましたが、30余年中私を除く全部が戸倉村に行くことを主張しました。これには、東京の校長や教頭といった栄達と捨て、僻地教育に一生を捧げた匹田先生の墓がそこにあったからです。この時、このようなのが師範魂というのだろうかと感じましたが、自分としてはこんなにはなれないとも考えました。今日教員養成大学卒業生と一般大学卒業生で教師をしている者に何のの違いがあるのでしょうか。私はこのことに関心をもっていますが、さすが大学を卒業して来ただけのことはあり、余り差は見られないように思います。たゞ、児童や生徒に対する奉仕の精神といったものは過激と比較してどうなるのかという点で研しい思いをすることがあります。

現在週一回秋田大学に講義に行っております。壁にステッカーを貼った跡を見るたびに大変目ざわりだと考えます。小中学校教員としておりました頃、通学路上にある落書きを子ども達と一緒に消して歩いたことがあります。ステッカーは表現の自由ということでは貼っているのですが、貼った跡の汚さをどう見ているのでしょうか。自己主張が余りに強すぎるように思います。

5. 数学と人間性

数学ができるくらいの子どもはなんでもできる、といった命題と、数学ができない子どもは何をやってもできない、という命題を考えてみる事ができます。生徒動員の際、数学のできない生徒が遠い夜道と歩いて早朝の駅に達し、当時入手難であった鉄道の切符を恩師のために買って来たのを知ったとき、数学ができない生徒の中にも人間性においては考っていない者が居るということを発見しました。数学ができない子どもでも日常生活をする上では大してさしつ

かえがない場合もより、人間的にも立派な者も居るわけですから。

今日の世の中は必ずしも明るくないと思います。私は、思いやり
の心や奉仕の精神といったものが今日重要なのではないかと考
えており、算数、数学の教育と共に全人教育ということと念頭に持ら
たいものと思っております。